
Last Sex

藍雨 和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Sex

【Zコード】

Z56680

【作者名】

藍雨 和音

【あらすじ】

人生に疲れてしまった少女、佐藤 絵里は飛び降りるために廃ビルの淵に立っていた。

絵里の脳裏には形式上の夫婦と誰もいない学校が思い浮かぶ。意を決して飛び降りようとした矢先に現れた横槍。

ハニーブラウンを靡かせる美少年、奏はイタズラな笑みを浮かべて口を開いた。

ねえ、俺に買われてみない？

複数話完結形式で色々な女性の人生とその人生に関わる少年の人生を書き綴ります。

恋つて何？

愛つて何？

sexつて何？

多くの人が一生に一度は思う疑問、それを人の人生を借りながら處理及していくうと思います。

なおこの小説に出てくる企業・学校・公共団体・地名・人物などは全て架空のものであり、上記の名前が被つていたとしてもまったく関係がないことをここに表記します。

またこの小説には未成年の飲酒・喫煙・性交などを描く場合がありますが、それはあくまで小説上の出来事であり、未成年の飲酒・喫煙・性交を助長・贊同・擁護するものではないことをここに表記します。

次いでこの小説にはR15相当の性的表現（ディープキス・愛撫等）が文章ちゅうございますのでここに表記いたします。

十五歳未満の方・性的描写を好まない方はご閲覧をお控えください。

では以上のことを心中に置いた上で奇妙奇天烈・傾道・邪道・悪道・奇異をこよなく愛する藍雨 和音の駄文をお楽しみください。

佐藤 納里編 第一話・境界線（前書き）

これから性的描写が含まれる話の前書きにある「」とを記入させていただきます。

それを一つの判断材料としてください。

風に弄ばれた髪が頬を叩いて鬱陶しい。

上を見上げれば月光さえ遮る雲。下を見下せばクッショングラス無のコンクリートの地面。

フェンスは越えた。一歩踏み出せば身体と視界は反転して落下運動を起します。

去年の今日、この時間にここにいれば、多分、こんなバカらしさことをしようとは思わなかつたと思つ。

でもこの一年で私の心は口唇のように固まつてしまつたみたいだ。

瞼を閉じればマネキンのような父と母の顔が霧のように浮かびかけた。

でも結局それは霧散して形作ることはなかつた。

もう、疲れた。

瞼を閉じて、大きく息を吸つた。息を吐かずに身体を反転させて、ゆっくりと力を抜いていく。

後は身体の重心を少し傾ければいい。そうすれば終わる。

痛いことは嫌いだ。
辛いことは嫌いだ。
心が痛い。

心が痛いと感じなくなつたことが私に人間失格の烙印を押しつける。
だから終わらせよう。

身体が傾いた

「ねえ、君。ピンク色のパンツが見えているよ。」

予想外の登場に、予想外の言葉に、私は思わず身体に力を込めてし

まつた。

そして声のした向こう側には一コ二コと笑む、一人の少年が居た

これが私、自殺未遂の少女、佐藤 紘里と変態セクハラ少年、藍川 奏の物語。

第一話の裏話を少し
藍雨 和音は基本的に自分の感じたこと・経験した事しか書きません。
ですから自分の出来る範囲では登場人物の心情を理解するために行動を起こします。

今回、絵里の心情や風景、舞台状況などを理解するために廃ビルに行つたわけです。

絵里と同じようにフェンスを越えて、呆然としていると青い服を着たお兄さんに見つかってしまいました（笑）

それから説得 身柄確保 連行 説教のフルコースを受けてしまいました

母には馬鹿だと大笑いされ、ポリには「ツテリと絞られ散々でした。それでもまあビル風や、不安定さなど様々な経験を出来たのでよかったです」と思っています。

最近はいつ夜中の学校に忍び込んで、一泊しようかな、と頭を捻らせている和音でした

誤字・脱字などがありましたらお手数ですがご連絡ください。
また、他の一作については私の精神が不安定なため、不定期更新とさせていただきます。

落ち着き次第、隨時更新させていただきますので何卒よろしくお願ひします。

また、感想などをいただけますと、和音は大変よろじびます

一日の終わりを告げるチャイムが教室に鳴り響き、周りが騒がしくなっていく。

私は必要最低限の荷物をカバンに詰め込むと足早に教室から離れる。

この学校には私の友達などいない。
この学校には私の敵しかいない。

「ねえ～、佐藤さん。これから友達とカラオケに行こうって話になつたんだけど、もし良かつたら佐藤さんも一緒に行かない？」

後ろから甘つたるい声が聞こえてきたが、私は無視してさらに足を速く動かす。

ドアを勢いよく閉めると中から笑い声とともに『何あれ～。せつか誘つてあげたのに～。』と聞こえてきた。半年前なら私の性格上突っかかるつただろう。

玄関へと続く昇降口を降りると女の子と一人すれ違った。

名前は覚えていないけど、たしか同じクラスだつたと思つ。

女の子は私の顔を見て、なんとも言えない表情をしていた。

上履きを靴箱に片付けて校門を出ると桜並木の続く坂を下つていく。

毎年、胸に期待と不安を詰め込んだ新入生がこの桜並木を通ると誰もが驚いていた。

アスファルトは桜の花びらによつて覆い隠される。

黒く薄汚れた道路を薄紅色のカーペットを敷いているにもかかわらず、見渡せば周りには同色の木々が毅然と立ち並んでいる。生徒たちに少しばかり遅い入学記念として、必ず記憶の片隅を陣取るほどの想い出を贈る。

私はその光景を後、何度焼き付けることができるのだろうか。

そう考へると淀んだ笑みがボロボロと歳月を浴び過ぎた塗料のように崩れ落ちた。

本当なら、そんなことを考へる必要もなかつたのに。

自分の顔が歪んでいくのが鏡を見なくても分かつた。

はあ、あの男のせいで遣りそびれちゃつた…。次は一月後くらいかな…。

次の算段を軽く立てるとな家の前に着いた。

重く重い鉄製のドアを開けると靴を脱いでからそれを整える。壁にひつつけるとスリッパを出してからそれを履く。カバンを持ち直して部屋に続く階段に足を掛けて一言。

「…ただいま。」

舌打ちのように小さく吐き出すとなるべく音が立たないように階段を駆け上がっていく。

『絵里』とパステルカラーで塗装された木製のプレートをひつくり返してから部屋に入る。

カバンを机の上に載せてブレザーに手を掛ける。

皺にならないようにハンガーにかけて小学生の入学祝としてもらつた勉強机の前に腰を据えた。

筆箱と教科書、授業で板書したノートとルーズリーフを机の上に並べる。

いつもは自動的に動き出すといつに手は石のよろに重くて動かせそうな気配すらない。

十分ほど手を動かしてみたけど、今日はこれ以上動きそうな気配はない。

仕方なく私は散らかしてしまったシャーペンや消しゴムを片付けるとベッドの上に身を落とす。

畜光性のある塗料によって描かれた嘘塗れの夜空。

それから皿を背けると皿を瞑つた。

どれくらいの時間がたつたのかは分からぬ。でも私はいつの間にか眠つていた。

ベッドの上で横になるといつもの間にか口付が変わる……なんてのはよくあることですね、はい。

それのせいで何度も喉を痛めて、何度も風邪を引いたことか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5668o/>

Last Sex

2010年11月5日17時30分発行